不定期刊行　　第 357 号　2010.06.06

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

県大会･･･運営の立場からセルフレスキューについて

県大会が終了した。下見をした段階では、霊仙寺山から飯縄山への稜線は道も不明瞭なほどに笹に覆われており心配だったが、以前紹介した長野工業の近藤先生の所属する「飯綱岳友会」の皆様による笹刈りのおかげで、随分歩きやすくなり大会は順調に日程をこなすことができた。この場を借りてお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

さて、僕自身のことで言えば、オブとはいえ、美須々時代の１９９８年以来、１２年ぶりに生徒を引率しての参加であった。たとえオブであっても生徒が参加するとなれば、一緒に計画書を作成し、装備や食糧を準備しなくてはならない。大変ではあるが、やはり張り合いがあるし楽しいものだ。その生徒たちのことを言えば、僕は役員だったので大会中は、ほとんど彼らと接することはなかったのだが、帰りの車の中で、「２泊３日の大会の中で、他校と炊事を一緒にしたことや、計画書の交換などもでき、総じて楽しかった」という感想を語ってくれた。連れていってよかった。

僕は今年も正規チームの末尾として、ポイントの確認をしながらコースを歩いた。「飯縄東高原～霊仙寺～飯縄～瑪瑙～戸隠牧場」という北信の定番コースで行なわれた今回の大会であったが、いくつかの反省点もあった。審査上の問題点については、後日審査員会から出される講評に委ねたいが、運営の立場で、霊仙寺山直下で発生した生徒の捻挫とその後の対応について、今後に資するために整理してみたい。

まず、事故の一報がはいった時間帯は、ちょうど早いチームのゴール時刻とも重なり、本部は審査と運営の両方で手張ってもおり、現地からの状況がきちんと掌握できていないこともあり、混乱していると考えられた。そこで、偶然山頂という無線が一番通りやすい位置にいたこともあり、僭越とは思ったが、立場上また経験の有無等総合的に考えて僕が司令塔になるのがうまくいくだろうと判断し、無線ブレークを入れ、現地指揮を買って出た。

第一報では、「オブの女生徒が足をひねったが、二人で支えれば歩ける。本人はぐきっと音がしたと言っている。」という感覚的な表現しか情報がはいってこなかった。実際に患部をみていないことも想像されたが、怪我人の状況を客観的に診ることやその結果を報告することに慣れていなかったことも現実問題としてあった。そこで、それが可能な人間を現地に急行させることが不可欠と考えた。同時に怪我人が女子でもあり、一度気持ちが萎えてしまうと歩くことは不可能とも判断、背負うことになるだろうという予測も立った。さらに下ろす場合の霊仙寺尾根の急坂等の地形も加味すれば、当初本部が指示した霊仙寺下部にいた二人だけでは現状把握、その後の対応ともに難しいと考え、経験者として現地近くにいるメンバーで上記の怪我の見極めから搬送まで任せられるのは、１，浮須、２，小沼または筒井、３，西野の各氏であろうと考えた。本部が飯綱キャンプ場から戸隠キャンプ場へと移動した関係上、また私自身も飯綱山を越えて移動中のため、無線は山を挟んでとなる関係上、頂上中継が必至であるので、筒井さんに無線

中継を引き続きお願いして無線連絡を確保した。
　女生徒の気持ちを保たせることを考えると、仮に背負えなくても、生徒にとっては横内さんのような女性の先生の存在も心強いとも考えた。そこで山頂にいた浮須さんをリーダーに、西野さん、横内さんを現地に派遣してまず状況の確認をした上で、システム構築をしてほしいと依頼した。
　10 分後、現地に到着した浮須さんより「捻挫だと考えられるが、歩けそうもないので湿布とテーピングをした上で背負い搬送する。」と状況連絡があり、合せて増員要請があった。そこで頂上直下で待機していた小沼さんにも現地への急行を指示。あとは浮須さんに任せれば大丈夫だろうと確信したが、その通りの結果で無事搬送が行なわれた。
　一方で飯綱キャンプ場に下りていた松田さんの対応も、場慣れしたそれであった。スキー場に連絡をとってゲレンデを専用車で上がってもらうことにより、登山道を下るより、距離にして三分の一、標高差で 500mほど高い地点での怪我人のピックアップが可能になった。いずれにせよ、やはり日頃からセルフレスキューをできるようにしておくことの重要性を再認識した。そして改めて感じたのは、山では１に体力、２に経験、３にも４にも体力だということだった。

「七人の侍」・・・救助に活躍した横内先生の感想です

　今回の大会で、一番印象に残っているのが足を捻挫した生徒への対応です。
　普段、志学館の女子は元気なので、怪我をすることなど思えば想定外だったと思います。もちろん、大西英樹先生がレスキューザックを持って行ってはいるのですが、かといって、生徒を何時間も一人が背負って降ろすことは、到底できない無理なことだということを実感した良い機会でもありました。
　怪我をした女生徒一人に最終的には7 人の男性教諭がつきましたが本当に頼もしかった。今回はたまたま動ける人員が近くに何人もいたことや無線を聞いて、すぐにスキー場の方と連絡をとってもらったことで搬送が最短距離で済んだこと、骨折などの重大な怪我ではなかったこと、スキー場の方が本当に親切な方であったことなど連携が上手くいったり、ラッキーも重なったりしましたが、ちょっとでもそれが狂ってくると疲労の度合いも増してきます。
　そして何よりも山で必要なのは体力と思いました。今回交代で汗を滝のようにかきながら搬送しておられた先生方の強靭な体力に本当に感服いたしました。
　率直な感想、皆さんとてもカッコ良かったです。さすが山男です。
　いつなんどき、何があるかわからない、でも何があっても慌てない。そんな心構えで生徒を連れて行かないといけないとつくづく思いました。
　勉強になりました。ありがとうございました。

編集子のひとりごと

　県大会の出場者数 122 名。最盛期に比べれば減ったとはいうものの、それでも全県から 120 名をこえる山岳部員が一同に会することの意味は大きい。単に競い合うという競技でないだけに、生徒間には連帯感も生まれたり、ともにやりとげたという充実感を共有できたりもする。冒頭にも書いたが、たった２名の池工の生徒にとってもいい意味で刺激になる大会だったようだ。この刺激を次につなげられるといいのだが。（大西　記）